～ 輝きの子育て ～

伝統というもの

現在の第１２６代天皇、皇后両陛下は今年６月９日にご成婚３０年を迎えられました。「国民と苦楽を共にする」という皇室の在り方を大切にしつつ「この国の人々の新たな可能性に心を開き続けていくことができれば」と抱負を示されました。ご成婚３０年の特集番組が放映されていましたが、日本人にとって天皇はどのような存在か？と尋ねられたら、両陛下は我々日本人の精神的支えになっているように思えます。

男女平等の世の中で、なぜ男系を続けるのか？という考えもあるようですが、二千年続いてきた理屈なしの伝統の中の伝統なのかも知れません。

最近の様々のニュース等を耳にしますと「失なわれゆく日本」を感じ不安になります。最近、小冊子の中で目に触れた「伝統というもの」の藤原正彦氏の文面がとても印象深く心に残りました。その内容を一部ですが、そっくり掲載させて頂きます。

古くからの慣習や伝統、広くはその国の文明とも言うべきものは、人が尊ばなくなると次第に衰微し、やがて消えてしまう.『文明の衝突』の中でハンティントン教授は世界の文明を七つに分類した。中華文明、ヒンドゥ文明、イスラム文明、東方正教会文明、西欧文明、ラテンアメリカ文明、そして日本文明の七つである。分類を試みた学者は誰もが、小さな島国日本の日本文明を中華文明に組み入れようとし、結局は皆日本文明を独立したものとする。

日本文明とはいかなるものであったのか。１６９０年に来日したドイツ人医師ケンペルは、著書『日本史』の中で「国民は道徳、教養、技芸、立居振舞いなどの点でどの国民よりすぐれ、世界でも稀な長さにわたり平和と幸福を享受している」と述べた。

オランダ、スウェーデン、ロシア、ペルシャ、インド、インドネシアなど外国に十数年間暮らした彼によるこの著書は、ゲーテ、カント、ヴォルテール、モンテスキューなど知識人に広く読まれ、日本観形成の礎となった。また幕末から維新にかけて来日した欧米人が一様に瞠目（どうもく＝驚いたり感心したりして目をみはること）したのは、誠実、忍耐、謙譲、正義、勇気、礼節、孝心、名誉と恥、卑怯を憎む心、惻隠（そくいん＝あわれみの心を抱くこと）といった日本人の情緒と形であった。また彼等は異口同音に「人々は貧しい。しかし、みな幸せそうだ」と述べた。貧しさイコール不幸と考える彼等にとってありえない光景だったのだ。日米修好条約締結のため訪日した米外交官・ハリスは、欧米文明がこの、ある意味で完成された社会を破壊してしまうのではと懸念し、「（日本の）新しい時代が始まる。日本の真の幸福となるのだろうか」と日記に記した。ハリスが懸念した通りに、明治の文明開化や大正昭和にかけての西洋崇拝により、日本文明という誇るべき伝統は古い日本の遺物として軽視されていった。その結果、日本文明にとって、卑怯と惻隠に触れるという点で最も忌むべき弱い者いじめにすぎない帝国主義に、我が国はその醜悪を欧米に諭す（さとす）こともないままのめりこんで行った。戦後はＧＨＱに「日本」をことごとく否定された。アメリカはヨーロッパの古い慣習や伝統に決別して作った移民国家である。伝統と呼ばれるものはない。むしろ常に古びたものを壊し新しい地平を拓こうと改革を続ける国である。そこで長く日本精神を軸に動いていた我が国の在り方を、アメリカは後進性の表れと見なし、代わりにアメリカ型民主主義を押しつけた。かくして世論が最高権力となるポピュリズム（支配勢力にたいして大衆運動を動員するために用いられる政治）に陥ることとなった。

引用文：文芸春秋 第１０１巻 第６号 「伝統というもの」藤原 正彦 氏文

産経新聞６月２５日朝刊で黒田勝弘氏の《 から“韓”くにだより 》の中で印象に残る文面がありました。

最近、韓国ブームに合わせ、日本から「韓国に住んでみたい」「韓国で働きたい」という若い女性の声が多く聞かれるそうです。そのような状況の中で、ワーキングホリデーの日本人若者を多く雇ってきたソウルの代表的日本人居酒屋「とんあり」の松本ひとみ代表の言葉がとても強く納得させられるものでした。

彼女は２０年前４０代で退職金１千万円を持って語学留学し、そのまま居酒屋を起業、一等地に自前の５階建てビルを建て、資産額１０億円にもなる日本女性として、韓国の最大の成功者のひとりである。

現在、従業員１５人のうち日本人が８人で、すべてワーキングホリデーと留学生という。韓国で働きたい日本人女性に「何か助言はないか？」と聞くと即座に「最近、日本人らしさがない。日の丸を背負って仕事をしてほしい！」という。あいさつなど礼儀、丁寧さ、気配り、そして責任感がなくなっているという。「日本人として外国で求められる人材になるのが先でしょう。日本人の魅力とは何か、ですよ」というのだった。

参考：産経新聞 ６月２５日 黒田 勝弘 氏 ＝ ソウル駐在客員論説委員

片野　英子